

初年次における学生生活と学びのダイナミクスを捉える

「学生パネル調査」に基づく検討

【発表者】 山田剛史 (島根大学教育開発センター)
雨森 聡 (島根大学教育開発センター)

1. 問題と目的

学校間の移行における適応問題は初中高等教育あらゆる段階で喫緊の課題となっている。高等教育の文脈では、昨今の急速なユニバーサル化への移行過程で浮上した広狭含む多様な学力問題に焦点が当てられてきている。スムーズな移行(適応)を促すべく、高大接続や初年次・補完教育プログラムなど、様々な取組が行われている。一方、こうした実践の急速な広がりに対して、国内における研究面での蓄積は十分とは言えない。特に教育プログラムの効果検証やその基盤を支える大学生に関する理論的・実証的研究などが今後求められると思われる。複数の研究グループや企業団体などが大規模調査を実施し、その実態の大枠を捉えることは出来るが、横断型の一地点調査が主となるため、より詳細な学生のダイナミクスを捉えるには至っていない。

筆者は学生のダイナミクスを「時間軸」と「空間軸」から捉える。具体的には、個人の軌跡(プロセス)と学生生活活動の広がり・連関(システム)、言い換えれば「教授・学習」と「成長・発達」の包括的観点からアプローチしていくことが必要と考えている。

そこで、本研究では、本センターが2009年度より実施している「学生パネル調査」に焦点を当てて検討を行う。本調査は、入学から卒業までのプロセスを個別かつ包括的に捉え、学生の「学習者としての育ちの基盤把握」に基づき、効果的な学修支援や教育内容・方法の開発を行うことを目的としている。

具体的には、入学時と2年次の2回の調査で得られた態度・技能に係わる自己評価デー

タ(学習成果)と知識に係わる教務データ(GPA)(Outcome/Output)との関連から学生類型を導出し、学生が1年次に力を入れてきた活動(Engagement)と初年次教育の特色でもあるアクティブラーニング経験の多寡(Environment)の観点から分析・検討を行い、初年次における学生生活と学びのダイナミクスについて示唆を得ることを目的とする。

2. 調査の概要

【調査時期】《第1弾》2009年4月中旬、《第2弾》2010年4月中～下旬

【調査方法】《第1弾》必修科目の授業時に配布・実施・回収、《第2弾》学生個人宛に個人結果も同封の上配布・回収+web

【調査対象】調査対象は表1の通りで、本研究では、両方に回答のある学生を対象とする。

表1 対象者の内訳

学部	1年次4月 回答/対象(%)	2年次4月 回答/対象(%)
法文	227/234 (97.0)	75/231 (32.5)
教育	165/171 (96.5)	64/170 (37.6)
医	156/156 (100.0)	49/156 (31.4)
総合理工	407/425 (95.8)	130/415 (31.3)
生物資源科	200/209 (95.7)	70/205 (34.1)
合計	1155/1195 (96.7)	388/1177 (33.0)

【調査内容】主な調査内容は表2の通りで、本研究では、太字の項目群を対象とする。

表2 調査の内容と構成

変数の性質	主な項目(群)
Input	進学動機, 入学事情, 入学形態, 経済状況
Environment	授業内容・方法, 学生支援等の満足度, 授業経験
Engagement	学習・生活習慣, 学習時間, 力を入れた活動

Psychological	授業観・学習観・学習意欲 不安・心配事
Output/Outcome	学習成果・ニーズ 学業成績、卒業後の進路

3. 結果と考察

■分析 1：学生の類型化

ここでは、Outcome/Output を分析の基点に据え、学生の類型化を行う。具体的な変数としては、学習成果（態度・技能）に関する 25 項目（4 件法）と成績（知識）に関する 1 年次の GPA 値を取り上げる。その際、対象者の中の相対的な位置（相対評価）と学生個人の伸びしろ（個人内評価：2 年次と 1 年次の差分）の観点から、高低・増減の組み合わせによる類型化を行う。

まず、入学時（N=352）と 2 年次（N=366）それぞれの学習成果 25 項目の平均値を算出したところ、前者 65.3、後 65.9 と同程度であった。次に、2 年次と 1 年次の差を取ったところ（N=352）、数値が減少している学生が 151 名（42.9%）、増加している学生が 186 名（52.8%）、増減なしの学生が 15 名（4.3%）であった。さらに対象者の 1 年次の GPA の平均（2.33）を算出し、これらの高低・増減の組み合わせから類型化を行った（表 3）。

表 3 学習成果と GPA の高低・増減による学生類型

	学習成果(高)		学習成果(低)	
	伸び+	伸び-	伸び+	伸び-
GPA(高)	①0 (0.0)	②30 (8.9)	③36 (10.7)	④108 (32.0)
GPA(低)	⑤55 (16.3)	⑥26 (7.7)	⑦27 (8.0)	⑧55 (16.3)

注) 数値は人数, カッコ内は全体の% (N=337)

■分析 2：学生類型と重点活動

次に、上記の学生類型における重点活動の差異に着目する。これは学生が入学後 1 年間で得た Outcome/Output がどのような活動（パフォーマンス）を中心としたものなのかを捉えることを目的としている。本調査では、11 の学生生活活動を列挙し、1 年間頑張ってきた活動を複数回答可の形で選択させた後、最も力を入れたものを 1 つ選択させている。

主要な重点活動と学生類型のクロス集計を示したものが表 4 である。

表 4 学生類型と重点活動(一部)のクロス集計

	授業	部活	バイト	授業外 学習	交流	趣味
type2	19 (63.3)	5 (16.7)	0 (0.0)	1 (3.3)	4 (13.3)	1 (3.3)
type 3	23 (67.6)	1 (2.9)	0 (0.0)	3 (8.8)	1 (2.9)	4 (11.8)
type 4	43 (41.0)	25 (23.8)	8 (7.6)	3 (2.9)	15 (14.3)	3 (2.9)
type 5	15 (28.3)	13 (24.5)	5 (9.4)	1 (1.9)	9 (17.0)	5 (9.4)
type 6	12 (50.0)	8 (33.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (8.3)	1 (4.2)
type 7	7 (26.9)	7 (26.9)	2 (7.7)	3 (11.5)	4 (15.4)	1 (3.8)
type 8	15 (28.3)	18 (34.0)	1 (1.9)	2 (3.8)	7 (13.2)	5 (9.4)
合計	134 (41.2)	77 (23.7)	16 (4.9)	13 (4.0)	42 (12.9)	20 (6.2)

注) 数値は人数, カッコ内は各 type の%

■分析 3：学生類型とアクティブラーニング

最後に、学生類型の差異を生むアクティブラーニング経験の多寡について検討を行う。これは調査期間とも重なる 1 年次に提供されている初年次教育の効果検証という文脈でも活用が可能で、そこで創意工夫されているアクティブラーニング経験がどのような学生の Outcome/Output に結びついているのかを捉えることを目的としている。対象者 0 の type1 を除く 7 つの学生類型を独立変数、アクティブラーニング経験の多寡に係る 5 項目（グループディスカッション、プレゼンテーション、グループ学習、体験・フィールド学習、実習・実験。4 件法）の合計得点を従属変数とした 1 要因分散分析を行ったところ、0.1%水準で有意差がみられ（F(6, 328)=4.51, p<.001）、多重比較（LSD 法）を行った（表 5）。

表 5 学生類型によるアクティブラーニング経験の差異

	type2	type 3	type 4	type 5	type 6	type 7	type 8
AL	11.8	10.1	11.3	12.6	12.3	10.6	10.3
多重比較	5>4>3,8/5,6>3,7,8/2,4>3,8						

注) 数値は平均, 多重比較は 5%水準